

「堺大絵図」に反映された 堺の景観と都市機能

The Landscape and Urban Functions in the *GRAND MAP OF SAKAI* Dated 1689

藤田裕嗣

FUJITA Hirotsugu

はじめに

- ①堺と「堺大絵図」に関する論点の整理
- ②「堺大絵図」に示された景観の特徴を探る試み
- ③「堺大絵図」から商品流通へのアプローチの試み
むすびに代えて

【論文要旨】

戦国期から近世前期にかけて輝かしい歴史の舞台として知られる堺環濠都市（大阪府堺市堺区）は、江戸幕府開幕当初、直轄地として堺奉行も置かれ、1615年に全焼の被害を蒙った後、その一部は今にも続く環濠が江戸幕府によって穿たれつつ、その内部も新たに区画され直したと考えられる。

大坂から南方、和歌山を目指す紀州街道をほぼ南北の軸線とし、それに直交し、摂津国と和泉国との国境にもなっている大小路が東西に走る。

国立歴史民俗博物館に所蔵されている元禄2年（1689）『堺大絵図』の特徴は、土地所有の1筆レベルで示している点にあり、本絵図が描く状況を現状と比較すれば、一部に大幅な改変が施されてはいるが、その基本としては踏襲されている。本稿では本絵図により明治期以降の変遷を含め、1筆レベルで検討できる点を生かし、元禄『堺大絵図』に示されている堺の都市構造は、江戸幕府が堺に込めた総意の表現と考えて、その解説を試みるという課題に特に注目して、分析のメスを入れた。

さらに、堺が位置する大阪湾は、17世紀になると、江戸幕府の肝いりで大坂が天下の台所として整備されたのみならず、18世紀初頭に大和川が西に一気に流れるよう、付け替えられた。この影響で、堺のすぐ北に流れ出す土砂量が増え、堺港の周辺が浅瀬になるなど、船の航行＝商品流通上、大きな影響を受けた。そのような動きの中で堺を位置づけようと試みた。

【キーワード】堺、絵図、環濠、土地区画、デジタル画像

はじめに — 問題設定

国立歴史民俗博物館所蔵、元禄二年（1689）「堺大絵図」は、堺環濠都市（大阪府堺市堺区）を約1/300の大縮尺で描いており、当館が誇る絵図と評価される。描かれた対象としての堺は、戦国期から近世前期にかけて貿易に活躍するなど、輝かしい歴史の舞台として広く知られている。

堺の環濠内が「堺環濠都市遺跡」とされ、その発掘・試掘調査は1,000件を越すに至った。地中に眠った戦国期までの都市像について問題にするのに、数少なかつた発掘地点の間まで、線として繋ぎ合わせてきた感も、かつては否めなかつたが、このような研究レベルは、発掘事例が増えた近年では越えられる段階に漸く至ったと言えよう。

そこで、発掘された遺構と遺物自体に素直に対峙する態度が一層、重要になっていると考えられ、地道な研究を進めていく具体的なアプローチ法が、今こそ求められている。この点で、近世前期における土地区画の状況について1筆レベルの詳細さで示す同絵図の価値は、すこぶる高い。貴重な絵図である点に鑑み、写真複製版も刊行されて⁽¹⁾、近世史学や建築史学など、様々な立場から研究が進められてきたとはいえ、1977年の出版と古いうえに、絵図自体が大型過ぎ、複製版も原寸の3分の1に縮小印刷されて、細部までは読みにくい難点があった。この難点は、近年になって進展しているコンピュータによる画像処理技術の進歩により克服できるとの期待は、高まっている。本研究プロジェクトでは、まず、高精細画像を構築するために、写真を撮影して、絵図に描かれた土地区画とそこに盛られた文字注記に関する基礎的なデータを確認・共有することから始めようと考えた。本絵図のデジタル画像を用いれば、発掘データをそれとの位置関係で詳細に検討でき、考古学が、歴史地理学・文献史学・建築史学と協働できる基盤となろう。同絵図に示されている堺の都市構造は、大坂夏の陣で全焼の被害を蒙った後、江戸幕府が堺に込めた総意の表現と考えられ、それを理解するためにも、その前提となる戦国期の復原が望まれているとの認識の上に立っている。

さらに、同じ近世前期に大坂が、江戸幕府の肝いりで「天下の台所」として大規模土木工事も伴って整備された。その中で、兵庫と尼崎を含む大阪湾、引いては瀬戸内や日本列島全体との流通関係をも念頭に置きつつ、商品流通の拠点としての堺が描かれた同絵図に新しい光を当て、再評価を試みようと考え、共同研究を2010年度に申請したところ、幸い3年間の計画が認められた。

共同研究の研究代表者として筆者は、専門とする歴史地理学を基盤に、次のような構想の下に研究プロジェクトを企画した。

まず、歴史地理学の本質は、歴史的慣性を重視し、現に存在して、目に飛び込んでくる景観について、単に現状として捉えるのみならず、歴史の積み重ねとして解釈しようとする点にある。堺の現行都市プランは、戦時中に焦土と化した後、戦災復興土地区画整理事業が施され、大きく変化した⁽²⁾が、基本的には環濠都市として理解される。すなわち、環濠の東側は埋められ、高架道路としての阪神高速道路路線の敷地となる一方で、南側一帯はそのまま残されている。この環濠自体の淵源は、大坂夏の陣で全焼した後、元和年間に地割奉行、風間新右衛門による新たな計画にまで遡り、元和期以前における多くの町の姿は、当時における新たな計画によって地上から消されたと考えられる。

戦国期の史料は数少ないために、そこから構築されるべき歴史は、残念ながら豊かな像を結ばない。さらなる挑戦は、依然として重要であるが、今、見られる景観を近世以前にまで遡らせられるのか、考察するには、冒頭でも指摘したように、考古学的な発掘調査結果はキーを握っている。

新しい環濠に囲まれた都市区画は、江戸幕府の意向が色濃く反映された典型的な近世都市として評価すべきであるにも拘らず、堺を西欧中世都市と比較して、日本の「自由都市」の典型と見做すなど、大河ドラマとして成功した「黄金の日々」のイメージの影響は、未だに残っているのではないだろうか。そこで、今回のプロジェクトでは、堺環濠都市遺跡の発掘調査に期待し、今後さらに増えるであろう緊急発掘の成果をも盛り込めるような、研究基盤の整備に力点を置く方針とした。その典拠として、間口と奥行きから成る土地区画のデータまで詳細に書き込まれた地図としての「堺大絵図」に注目したのである。

そもそも共同研究を発案した契機は、前年の2009年9月中世都市研究会における嶋谷和彦報告にある。慶長20年(1615)に焼失された以前の堺について発掘調査成果に基づいて真正面から捉えようとした報告に筆者は感銘を受けていた⁽³⁾。そして、翌年になって共同研究の公募があって、博物館の「堺大絵図」を具体的な対象とした構想を着想した際、嶋谷報告を想起した。メンバーについて博物館側と調整した結果、嶋谷氏にも参加してもらえることになった。

藤田の研究上のオリジナリティは、歴史地理学が伝統的に主眼としてきた景観に目配せしながら、商品流通をも射程に入れ込み、機能面にも考察を及ぼすことに拠って、景観論のさらなる深化を図る点に置いている。本論考では、国立歴史民俗博物館に所蔵された「堺大絵図」に焦点を当てた共同研究の成果報告を企図しており、景観論の対象とするのは、必然的に主に堺となる。

①……………堺と「堺大絵図」に関する論点の整理

大阪湾岸の南東方に位置する堺は、戦国期から近世前期にかけて日明貿易や朱印船貿易の拠点となり、会合衆により自治的に運営されるなど、輝かしい歴史の舞台として知られている。1615年の大坂夏の陣で焼かれた後、江戸幕府の直轄地として環濠が穿たれた内部は、地割奉行、風間六右衛門により区画し直された。国内市場の中心とされた大坂から西南方、和歌山を目指す紀州街道(大道筋)がほぼ南北に走り、それに直交して、摂津国と和泉国との国境にもなっている大小路が東西を画している。ほぼ南北の長辺で約3kmに対して、東西方向は最大幅で約1km、南北に長いほぼ長方形をなす。このうち、北端部分は、軸線も若干ずれており、別の規格である可能性も考えられる。これらの点は、1884年～1898年の測量に基づく2万分の1地形図を用いて、環濠とその周辺が示された図1を参照されたい。

国立歴史民俗博物館に所蔵されている「堺大絵図」は、元禄2年(1689)の作成であり、土地所有の単位としての1筆レベルに至る詳細さが、その特徴として挙げられる。短辺でも4mを優に超す巨大な絵図である。

1977年に発行された複製版は、当時に前田善正氏が所蔵していた大絵図に基づき、貼り紙等を一旦外して3分の1に写真縮小する形で、彼が経営する前田書店から出された。それと同種の大絵図が堺市役所に所蔵されていて、「堺市役所本」などと表現されているが、現在では堺市博物館が所



図1 仮製2万分の1地形図に見る堺の都市プラン

B奉行屋敷 T天神(菅原神社) N念仏寺 S宿院 KK紀州街道(大道) OO大小路
堺港関係 E戎島 H布屋掘割(1728-61年, 1790年再興)
1戎島湊 2南側の船溜(1830年頃) 3北側の船溜(1854年)
(原図は、「堺」1884測量・1898修正:「金田村」1887測量)

蔵している。それとの比較も、同じ複製版に収められた朝尾直弘氏と山澄元氏により解説されている。前者の、当時「前田善正氏蔵図」を修復して、高精細画像を作成した現時点でも、さらに付け加えるべき論点は、殆ど認められない。そこで、この解説を元に、絵図の作成状況や貼紙が付けられた事情に関する情報を略年表にまとめ、表1として示した。さらに、前者を基本として、後者、すなわち「堺市役所蔵図 (=堺市本)」(現在、堺市博物館所蔵)の特徴について、表2の形で示している。「11.保存形態」として掲げたように、2本とも、北庄と南庄とで別図になっていて、大きく2舗に分かれていた点も、確認しておきたい。

表1 「堺大絵図」関係の略年表

年号	摘要	典拠*
元和元年(1615)	大坂夏の陣で兵火に掛かり、焼失。堺政所長谷川藤広の許、風間六右衛門が地割奉行として、直ちに町割の基礎がつくられる。	p.73 など
元和・寛永頃	「宿屋町古絵図」	pp.15-16, p.98 に 図。
寛文4年(1664)	8/8「俄然として一島嶼を湧出し、次で同年十一月には同海中より一靈亀を、又同年十二月は戎神の石像を得、爾來之を奉祀して戎島と称し、島名をも戎島と称した」(『堺市史』の表現)。	p.141
寛文5年(1665)	「家屋敷売買帳」(家屋敷の水帳・検地帳と家持の五人組を兼ねる)	p.27
天和3年(1683)	「錦町中浜地割之絵図」	p.16 図3, p.95 に も図。
元禄元年(1688)	寺院古跡新地之定書を触れ、寛永8年(1631)を基準に古跡、新地と区別させる。	pp.35-
元禄2年(1689)	奉行佐久間宇右衛門信就の時、南北四辻の惣年寄に命じて当図以前に存在した町図も用いて調整、全面改訂・再編して本図を作製する。係与力真柳徳左衛門、同心小谷権兵衛、西島九郎左衛門の検閲を経る(絵図識語)。	p.3
元禄4年(1691)	質屋仲間を取り立てる。 寺社ならびに町方の改めにより補正を加える(絵図識語)。翌年に新古の区別は廃され、関係する付箋は絵図内にある。	p.28 p.8, pp.36-39, p.58
元禄6年(1693)	南北二組制(端郷の廃止)	p.28, p.79
元禄8年(1695)	戎島12町が取り立てられる。	p.28
元禄9年(1696)	堺奉行が廃止され、堺は大坂町奉行の支配下に移される。 「宿屋町水帳」など水帳が作製される。	p.28 pp.30-, pp.99-
元禄10年(1697)	水帳と水帳絵図の下付に際し、惣会所を通して家屋敷売買の規定、手続き、帳切等に関し詳細な覚書を定める。	p.30
元禄15年(1702)	堺奉行が復活される。	p.28
宝永元年(1704)	大和川の付け替え。前田本では貼紙で対応。	p.113
寛保2年(1742)	南の堀川内と戎島より北側の海域に付箋あり。	p.8, p.133, pp.143-
延享2年(1745)	土居・干場が払い下げられる。前田本では貼紙で対応。	p.61, pp.116-

*『元禄二己巳歳堺大絵図』朝尾直弘「大絵図の背景」、山澄元「堺大絵図に関する地誌的考察」

表2 「堺大絵図」前田善正本(国立歴史民俗博物館本)に対する市役所本(堺市博物館本)の特徴

項目	市役所本(堺市博物館本)	典拠*
1. 現状に至るまでの経緯	もと奉行所にあり、堺県、堺区役所を経て、1889年市制施行とともに堺市役所へ。貴重な文化財であり、戦時中、図書館に保管を移し、一時は家原寺へ疎開とも(市役所の関係者に語りつかれている伝承による)。	p.9
2. 伝存状態	きわめて良好で、美しい。保存上の大きな手入れがなされたあとも認められない。	p.9
3. 文字の差など	漢字がかなに、程度の差。重要でない部分は軽く描く。	p.10, p.12
4. 細部の記載の相違	各所にあり(例えば、祀堂屋敷について「市役所図の北郷においては、△に彩色せず、筆で略描しているにとどまり、市役所図が下図である一端を示している」p.57)。	p.57「重要な箇所は当稿でもしばしばとりあげる。」
5. 色彩	前田本が極彩色であるのに対して、淡彩。	p.10
6. 特に海の部分	淡い藍を刷いた上から浪の形を白で軽く線描したのみ。	p.10
7. 海岸部の変化	元禄以降の海岸部の変貌は描かれていない。	p.10
8. 識語、凡例など	「此印 御借地」を欠く。署名に印がない。	p.10, p.12
9. 付箋	寛保2年(1742)の他、延享2年(1745)土居と干場が町屋に開発された地区など、後世の貼紙も多いのに対して、天明6年(1786)八月の一紙が堺市本にのみ見えるのを除き、殆どが元禄5年(1692)五月まで。	p.116, pp.10-11
10. 絵図の性格	正本の前田本に対して、当初から惣年寄の手元に置いて副本として作成された絵図。	p.13
11. 保存形態	南北二舗(前田本は、さらに10枚に分かれる)。	
12. 写し	『堺市史』を編纂していた1926-7年に吉田春峰(時中)氏により全体を地域別に41区分した精密な写しが作成される。	p.9

*『元禄二己巳歳堺大絵図』朝尾直弘「大絵図の背景」、山澄元「堺大絵図に関する地誌的考察」

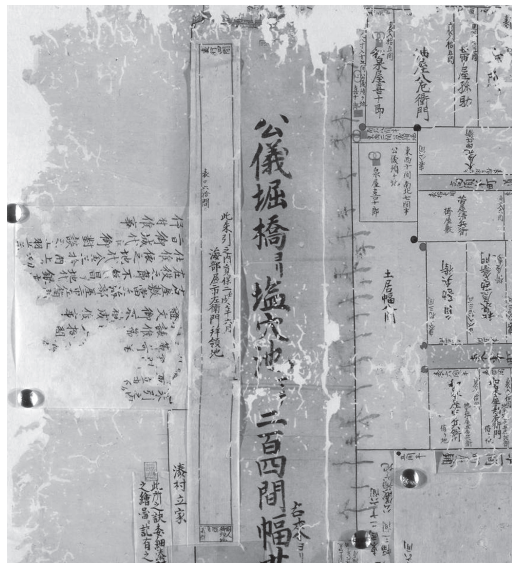


写真1 南堀における寛保2年の貼紙

このうち、「元禄堺大絵図」に施された多数の「9. 付箋」については、修理作業で一旦外し、もう一度、端を糊付けし、本紙に丁寧に貼り直してもらおう方針とした。年次が記されている付箋や貼紙もあり、絵図が貼紙を付加されながら、機能し続けていた時期が推定できる。表2の「9. 付箋」に拠れば、延享2年(1745)が最後であり、ということは、55年以上に及んでいることが判る。堺市本にはない寛保2年(1742)の貼紙のうち、南堀に貼られている例を写真1として示した。

なお、堺環濠都市を構成する各町は、大小路を境界線として、大きく南北両郷(のちに南北両組)に分けられて運営され、各惣会所において惣年寄5名、惣代3名、職事3名が任務に当たった。初期の惣

年寄は糸割符年寄を兼ねる門閥特権商人であったが、貿易体制の変化、生糸貿易の衰退によって17世紀後期には新興町人勢力に交代したとされている。その流れの中に、本絵図も捉えられるのである。

②……………「堺大絵図」に示された景観の特徴を探る試み

既に冒頭でも指摘したように、筆者が立脚する歴史地理学の本質は、歴史的慣性を重視し、現に存在して目に飛び込んでくる景観について、単に現状として捉えるのみならず、歴史の積み重ねとして解釈する点にある。堺の都市プランの基本は、元和に再計画された環濠都市であると理解され、この都市プランを対象に「元禄二年堺大絵図」がどのように描出しているか、という論点について、⁽⁴⁾本章では第一に問題にしたい。本章で特に問題にする寺社などや地区について、「堺大絵図」上における位置を示すために、図2を用意した。B奉行屋敷・T天神（菅原神社）・N念仏寺・S宿院の記号は、図1と共通にし、索引図の役割を持たせた。

まず、縮尺をめぐる議論を展開する。山澄元氏による報告でも「当図の大きさと縮尺」の見出しの下、「一間=六尺五寸」、「約三二五分の一すなわち一間を二分で表すことを原則としたと考えられる」と明記されている。⁽⁵⁾後者について、当時によく用いられた表現で言い換えれば、「一間二分之積」となる。

ここで特に問題にしたいのは、それに続いて、「ただし、矢守一彦氏が、正徳頃の『尾府名古屋図』（蓬左文庫蔵）の解説〔中村拓監修『日本古地図大成〕において、（中略）規則正しい方格地割にもかかわらず精度がすぐれているとはいえない」とされている点であり、実は筆者には合点がいかない。この点に対して、論考をさらに精密化する試みを行う。

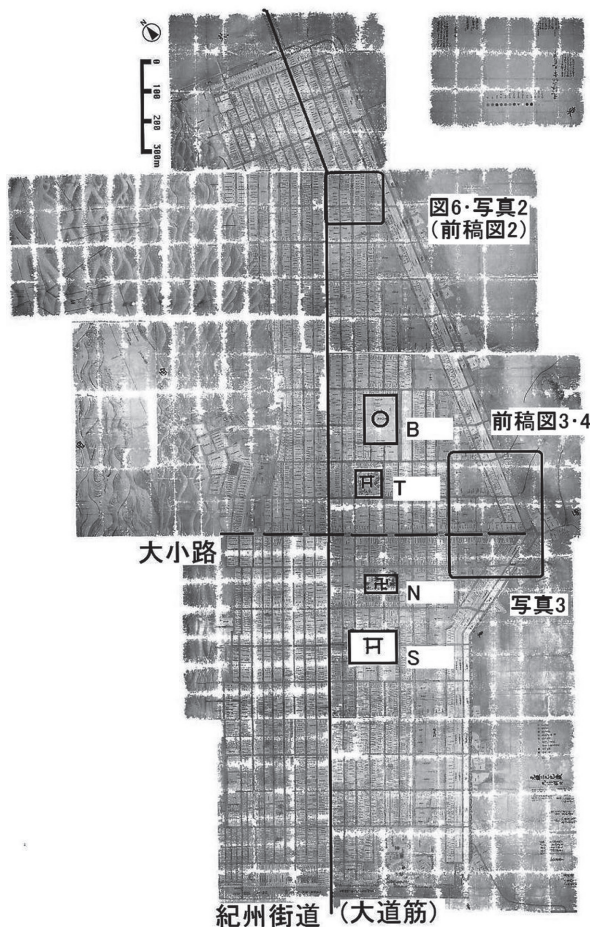


図2 「堺大絵図」と索引図



写真2 山口家住宅とその周辺

表3 「堺大絵図」における縮尺を計算するために用いた間口の長さ一覧

		「堺大絵図」で 記載された長さ	1/1,200 前後対照図* 上の長さ [実長]	1 間当たりの実長 (m) [1 間 = 6 尺 5 寸と仮定]
①	経王寺前町	63 間半と 1 尺 8 寸	102mm [122.4m]	[1.92]
②	与力同心屋敷の西面	127 間半	204mm [244.8m]	1.92
③	甲斐山口町	69 間	110mm [132.0m]	1.91
④	旭蓮院の間口	59 間 5 寸	99mm [118.8m]	[2.01]
⑤	南樽屋二丁目 (引接寺と少林寺)	60 間半と 1 尺 2 寸	99mm [118.8m]	[1.95]

*「1/1,200前後対照図」=「戦災復興土地区画整理事業地区内前後対照図」(昭和34=1959年8/11施行)

縮尺を計算するのに、道路で区切られ、その中が多数の土地区画で割られた一般的な街区についての当時における長さを知るには、個々の土地区画に記された間口と奥行の全てが読めることが条件となる。それらと現状との関係は、「戦災復興土地区画整理事業地区内前後対照図⁽⁶⁾」が、大いに活用できる。

実は個々の土地区画が確実に読める街区は、さほど多くはない。折れの部分から破れていたり、欠損部分がそれほど広くはなくとも、虫食いがあつたりするから、である。そこで、表3は、寺の部分とか、比較的広い範囲の間口で総計が判る部分を挙げた。その部分について計算した結果は、ほぼ1間=2分に集約されることが判る。

本絵図のデジタル画像によって、発掘データを本絵図との位置関係で詳細に検討でき、考古学が、歴史地理学・文献史学・建築史学と協働できる基盤を提供できると、そもそも考えたのであった。デジタル写真を撮影することで、絵図に描かれた土地区画とそこに盛られた文字注記に関する基礎的なデータの提示・共有を狙った訳である。実は、写真複製版の解説には、個々の土地区画の登録人について「いわゆる電話帳式」に基づいた「索引」も付けられており、そのデータを元に、エクセルで入力し、「戸別位置番号」順にソートし直して、本絵図をデジタル撮影するための前提となる平面を確保するための修理も完了させる前から、写真複製版を用いて校合を行った結果、かなり数の読み間違いも発見して修正した。修理途中における諸過程で貼紙まで多くの写真が提供されており、さらなる修正は可能であるが、その作業はまだ不十分なままである。

特に間口に注目し、間、間半、で割り切れない土地区画の分布は、図3で示した。この図を見ると、このような例は周辺に限られる傾向が明らかである。すなわち、中心部は、間、間半のほぼ統一の間口を持つ土地区画が整然と並んでいることになる。

その点を前提としたうえで、「堺大絵図」に示された土地区画について、注記された間口(尺寸分に換算)で原図上における実測値を除いた数値の散布図を図4と図5で示した。図4は、複製版の「戸別位置番号」で言うと、4-1と4-2のセットであり、図5は、8-1と8-2のセット、の2つに分かれている(図8も参照のこと)。横軸は「戸別位置番号」における下3桁(いずれも横軸の数字は1,2の順で続けている)、縦軸は原図における実長(単位はセンチメートル)である。虫喰い等で間口の数値が読めない場合、0になり、ドットが横軸自体に落ちる形になっている。後者に関する点は、大よそ一定の数値で揃っており、「堺大絵図」自体の縮尺に関して、1間は2分で表現されている傾向が読み取れる。精度はかなり良く、問題になるのは、前者だけ、と見做される。

なお、後者で8-2-142のドットは、異様な位置に当初プロットされたが、手元にある写真を拡大

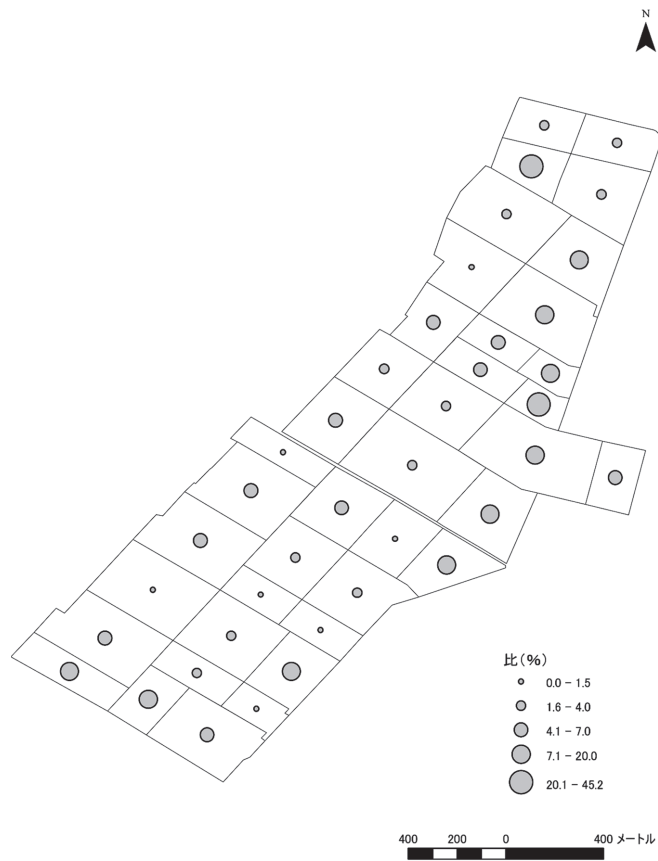


図3 間口について間以下の端が占める比率の分布

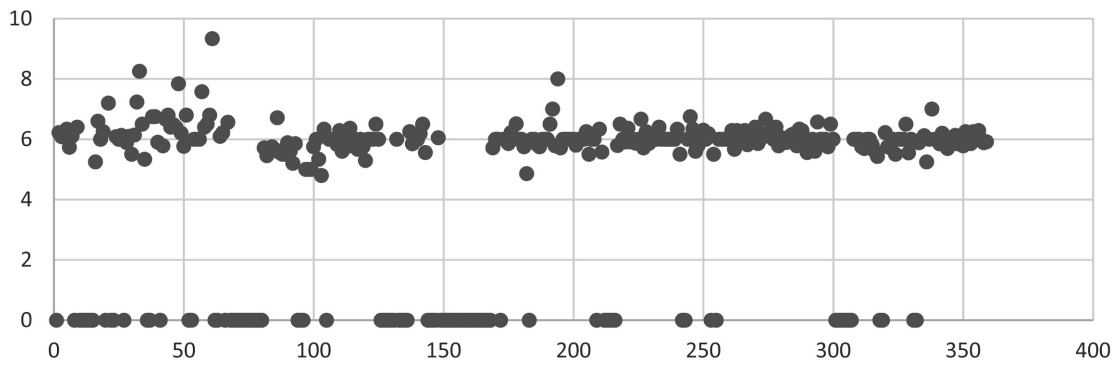


図4 間口の縮尺に関するデータの散布図(4-1,2)

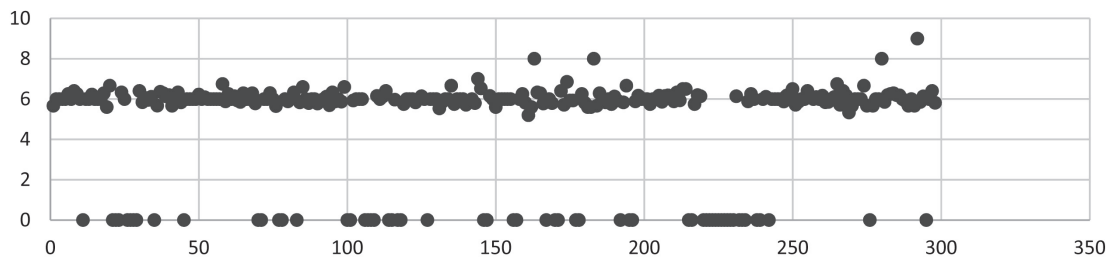


図5 間口の縮尺に関するデータの散布図(8-1,2)

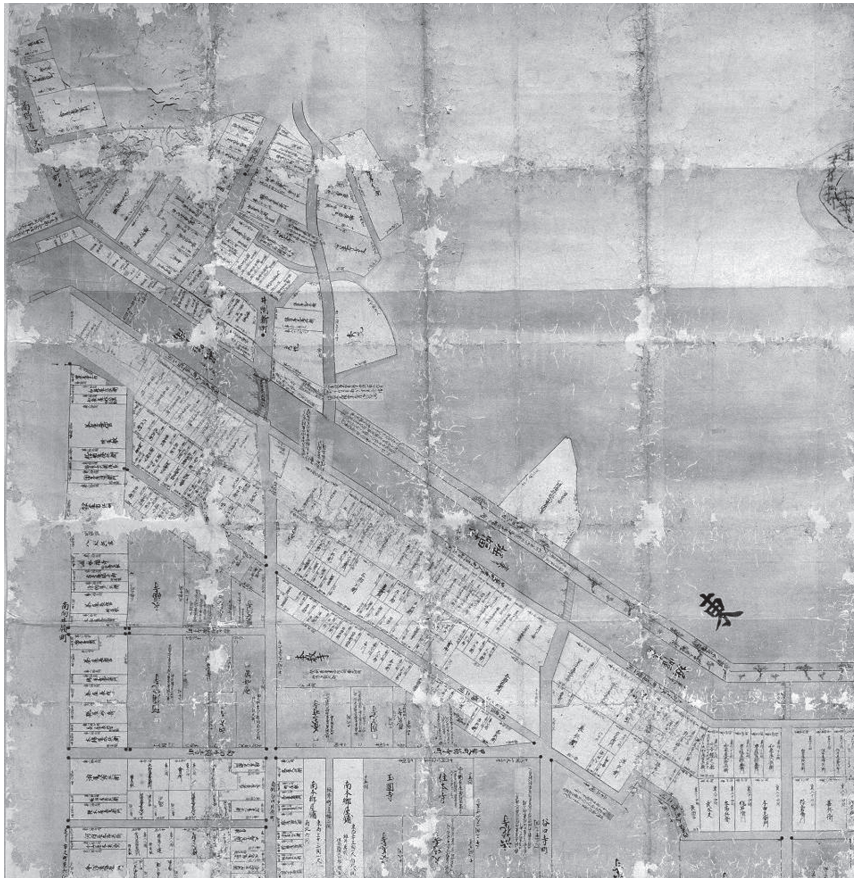


写真3 大小路の東端,東堀の外側

したところ、間口は「五間」が正解で、修正を施した結果、他の数値に近づいた（図5自体は修正済み；8-1地区は72区画あり、8-2-142は横軸214の位置）。異様に見える他の数値も、恐らく、この場合と同様の読み間違いか、虫食いなどのために読めないであろう、と推察される。それでも図4に示された4-1地区の先頭で、ばらついたドットが多数認められるが、これらは、環濠の外で、元より村落だった部分であり、間口で課税されていた訳でもなく、そもそも原理が違うので、何ら問題は生じない。環濠の外も含めて絵図4の一部を写真3に示したので、参照されたい。

ここで先ほど言及した山澄の検討を改めて確認すると、「正徳頃の『尾府名古屋図』（蓬左文庫蔵）の解説〔中村拓監修『日本古地図大成』〕において、3000分の1縮尺の50間に対し、3.1センチメートル～2.9センチメートルと2ミリメートルの偏差をとりあげて必ずしも精密でない」と述べているのと比較すると、紙のしわや切断にともなう歪みを考慮にいれても、規則正しい方格地割にもかかわらず精度がすぐれているとはいえない」とされているのである。問題にしたいのは、2点に分かれ、1) 結局、1割に満たない「偏差」を問題にしている点である。「堺大絵図」で言えば、5間当たり3センチメートルとなり、3ミリメートル以下の「偏差」に該当する。図4や5のレベルで1間当たりでは、0.6ミリメートルを問題にしていることになる。ほぼ問題にできないレベルである。2) 縮尺で言うと、1/3,000と1/325では10倍違っており、同列の議論ができるのか、疑問だ、という点である。

表4 「堺大絵図」における大区画の比較

		南北	東西
北	奉行屋敷	表 73 間半 裏 85 間	60 間 5 尺 5 寸
	天神惣境内	61 間	64 間
南	念仏寺總間（開口神社）	62 間 2 尺	61 間 2 尺 5 寸
	宿院總間	60 間	84 間

次に、北庄の「堺奉行所」と「天神社」（＝菅原神社）は、南庄の「念仏寺」（＝開口神社）と「宿院」に匹敵するような広さの区画となっている点が目立つ（前掲の図2を参照のこと）。これらの地区について南北・東西の長さに関して記された注記を整理して示したのが、表4である。南側の宿院と念仏寺（開口神社）に対して、北側に位置する天神とともに、奉行屋敷は、対称的な数値となっていることに気付かされる。計画的に区画された可能性が考えられよう。なお、表4で南庄の「念仏寺總間」と「宿院總間」とは、絵図自体における表現であり、北庄とは独自に作成されたのは、明らかであろう。

念仏寺と天神社は、南庄と北庄における住民結合の象徴的な中心であり、ほぼ類似した大きさの区画とされたのに対し、奉行屋敷は、宿院の大きさに対応させ、それを90度曲げる形で入れ込んだのではないだろうか。奉行屋敷以外の3地区は、その周辺に取り込む範囲は微調整できたであろうし、通りに対する対応関係は東側に1区画分ずれたり、一筋縄に行かないが、何らかの計画性を感じ取れるように思われる。奉行屋敷の「表」が短いのは、東側に11間2尺2寸の「丑寅角屋敷」があるためである⁽⁷⁾。

次に、その後の土地区画に関する変遷過程について議論を展開させる。

本絵図によって示された状況を現状と比較すれば、第二次大戦期における空襲で再び焦土と化したのを受け、終戦後における開発により、南北に貫通し、上述のように軸線として機能した紀州街道が、その1本西までの街区ごと道路敷地とされるなど、一部に大幅な改変もあるが、その基本は踏襲されている。

地中に眠った戦国期を復原する課題に取り組むに当たり、文献史料は意外に少なく、発掘調査に基づく考古学的な手法は頗る重要である。堺の環濠内の「堺環濠都市遺跡」として発掘された遺構と遺物を生かすのに、近世前期の都市像を如実に示す同絵図は、貴重な画像史料であると評価されるのであった。

中央をほぼ南北に貫徹する紀州街道の基軸も、北辺地区ではそれ以南に比べると正南北に近く、そもそも戦災からほぼ免れ、「戦災復興土地区画整理事業地区内前後対照図」の作成対象外に当たる。この図に代わる地図資料として、研究プロジェクトでは堺環濠都市地区全域について「1/500道路・河川等現況平面図に1/2500都市計画図を編纂したものである」とされている1/500「地形図（編纂図）」を入手した。「堺市役所（計画機関）」が「国際航業（作業機関）」に依頼して作成した旨の注記が認められる（「数値編集 平成21年3月」「承認番号平19近公 第224号」などとある）。描出の対象は、建物が主であり、全ての土地区画線が記されている訳ではなく、建物同志の間と推

測する以外、判断できないため、資料としては弱いと言わざるを得ない。道路で囲まれたブロック単位では、ほぼ対応する、との判断ができる程度である⁽⁸⁾。

北端よりも少し南側で山口家住宅の近辺について、前稿で「元禄2年の土地区画」と「明治初期の土地区画」を左右に並べ、比較する形で図2として示している。今回は、1枚に集約し、前者を実線に、後者は破線で表して図6とした。○印は山口家住宅の位置であるが、前稿で山口家住宅自体は増改築されていることに触れ、「東西共に区画が抜けられていることが判る」と説明した。すなわち、明治期になると、山口家の屋号、「越前屋」と注記された区画より東側に2区画分が抜けられ、3区画目に面している部分も半分程度、取り入れられている。越前屋が間口を向けているの

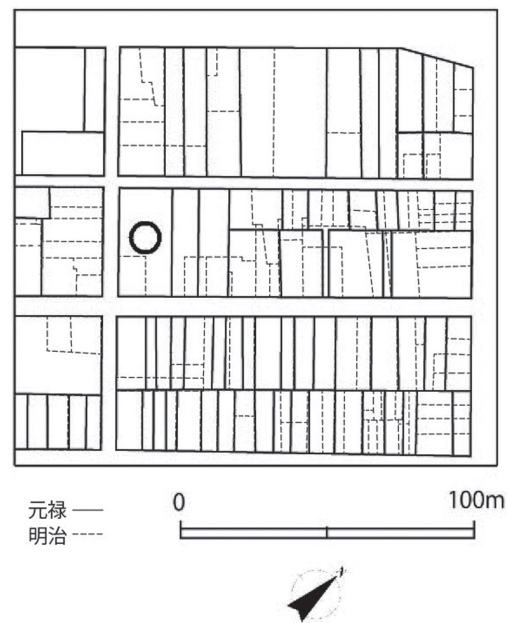


図6 「堺大絵図」に見る土地区画と明治期との比較
(山口家住宅周辺)

は、図では下側を走る道路であり（北鏡屋町、写真2も参照）、この道路に面している区画は明治期に細かく分筆されていることが示されている。さらにその次の南北道路を挟む錦柳両大工町のブロックでは、元禄期に角の区画は除いて、「大工」などと注記された「二間」の間口を持つ小区画が3つ並んでいたが、明治期には1区画に統合されている。一方、山口家住宅から西側の、横丁を挟んで向かい合わせの位置にある比較的広い区画は、明治期になると、逆に南北方向に6区画に分けられている。図6からは、このような変遷が見て取れる。

④……………「堺大絵図」から商品流通へのアプローチの試み

前章では「堺大絵図」を読図する中で判明する景観について検討を加えてきた。本章では視点を変え、商品流通へのアプローチを試みたい。

まず、宝永元年（1704）に大和川が付け替えられたのに伴う海岸線の進展・港湾機能への影響について検討したい。図7は、海岸線に関して「堺大絵図」の表現に注目して示したものである⁽¹⁰⁾。

海岸線の変遷については山澄も注意しており、第6章「海岸線の変化」で「市役所図における北郷の海岸線」に続いて、「当図における海岸線の変化」という小見出しが立てられている⁽¹¹⁾。これらの「海岸線」について、図7では二重線で表現した。さらに、山澄は、次のように続けている。

「やはりいったん屋敷割されたところが、海進により水没したとみるのが妥当であろう。このことに関連して、市役所図・当図双方にある注意すべき記号は、海岸線近くにほぼ平行して屋敷内に線がひかれ、その屋敷に茶色の四角い色紙が貼られていることである。この色紙は凡例にもなく、非公式の符牒的なものであろうが、推察するところ冠浸水の屋敷地で、課税減免などの目印であったのかもしれない。また当図にのみ不規則なカーブを描いて太目の二本線が九間

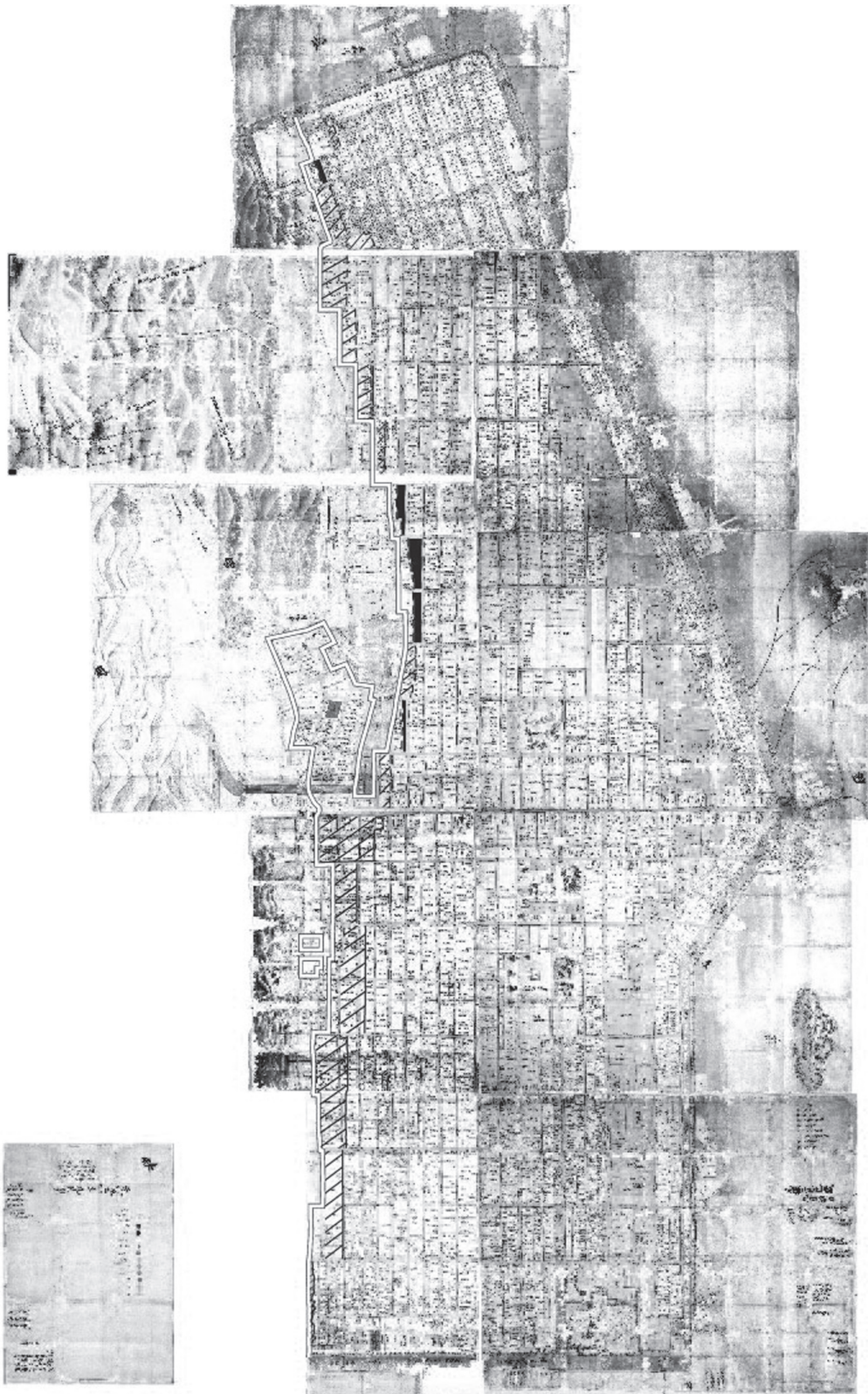


図7 「堺大絵図」に示された海岸線とそれに並行した朱線と墨線の位置
朱線に随伴する形で茶色の四角い付箋が土地区画線に付せられており、
朱線より陸側なら塗りつぶし、海側なら斜線を施した。

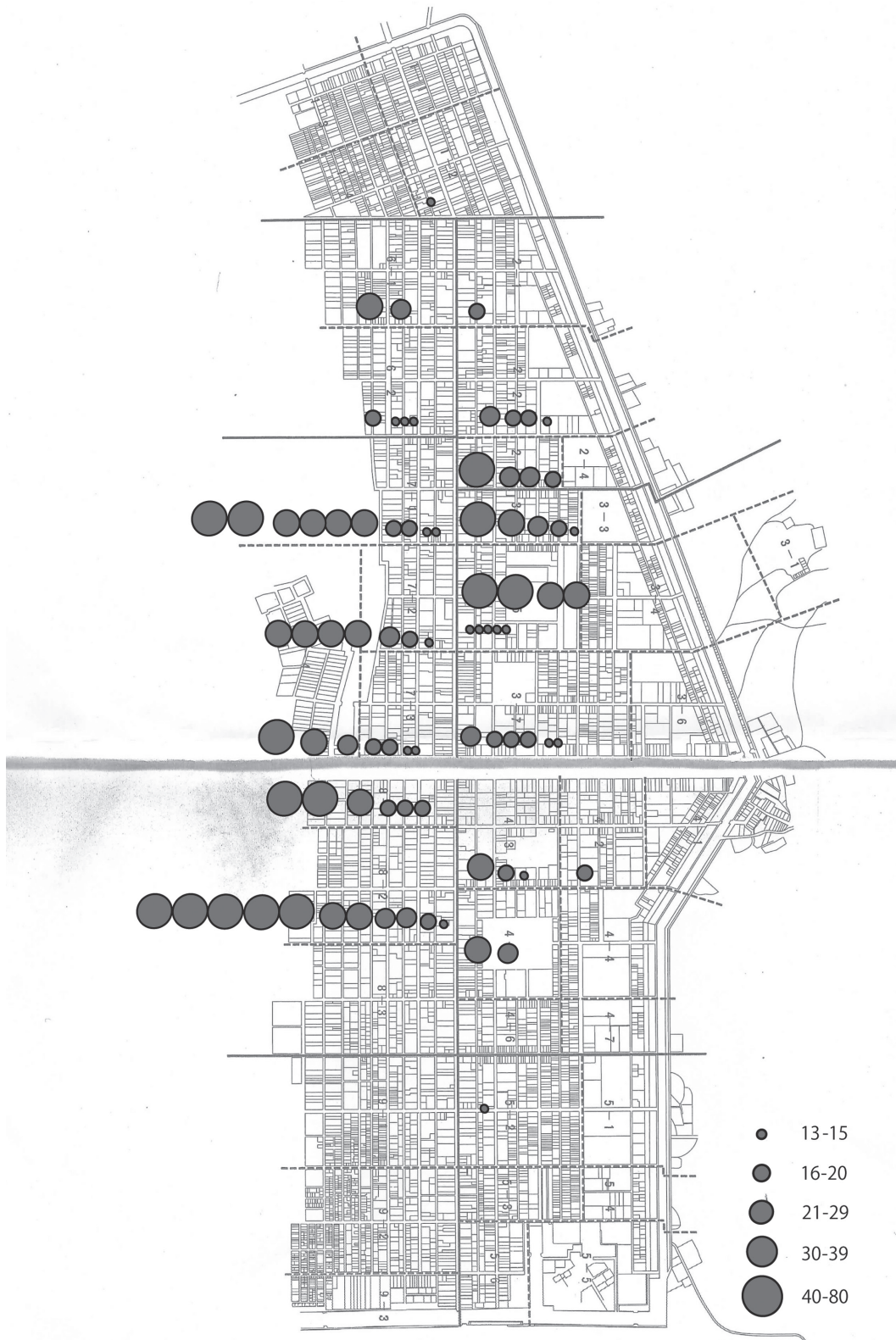


図8 元禄元年(1688)に割符糸を下附された登録人の分布
(「戸別位置番号図配置見取図」[前田書店出版部編「元禄二己巳歳堺大絵図」前田書店 所収]に加筆)

町浜以北に走っている。これはその位置から考えて、市役所図において『海二入』とあるところの境を示したのであろう。⁽¹²⁾

海岸線近くには、朱線とともに、その海側の区画には茶色の四角い付箋が貼ってあるとは判っていたが、大小路の北側は、太い墨線に代わっており、四角い付箋の位置は、一部は、陸側にも付いていると観察できた。陸側の部分は、図7では黒く塗り潰す形で表現したのに対して、海側に付けられている場合、斜線を施した。これは、堺市中央図書館に所蔵されている元禄頃「堺之図」に「町屋海二成」という注記がある点をも勘案すれば、元禄二年の作成以降に、後退した海岸線が注意深く書かれているのであり、元禄二年当時の区画が、そのままでは機能していない点を示していることになる。その解釈が妥当ならば、陸側でも、海側でも同じことになる。既に引用した山澄の見解に対して、筆者も賛意を表したい。

これら宝永元年（1704）に大和川が付け替えられ、大量の土砂が戎島付近に流れたことを主原因とした海岸線の前進・変化に伴い、港湾機能も影響を受けた。港湾の変遷について、図1では年代順に1～3の番号でその中心位置を示している。

景観と機能との相克について、近世界における「農人町」に関しては既に指摘しているので、参照されたい。⁽¹³⁾

他に考えられる論点としては、同業者町があり、既に山澄が詳しく説明している。⁽¹⁴⁾堺環濠都市における商人や職人の分布については、堺市博物館における展示は一目で判り易く、有用であるが、その内容に関して、残念ながら論文の形では公にされていないという。

顕本寺文書の元禄元年における「割符糸」の「下附」に関する注釈が、前田書店出版部編（1977）の「索引」の「注記欄」に載せられている。具体的に言及されている元禄元年「下附される」斤数を元に、凡例に示された5ランクに分けて、図8を作成した。基図は、前田書店出版部編（1977）の「戸別位置番号図配置見取図」である。

「元禄堺大絵図」に拠れば、当時の糸割符会所は、「3-7」地区にあり、菅原神社の東方、堺奉行所からは南方に位置した。図8を見ると、同じ地区に登録された人は決して少なくないが、下附された数が高い訳ではない。その北側の3-5の方が、数は多いし、斤数も高い。そして、より強い傾向性が看守されるのは、戎島の港周辺、すなわち、海岸線寄りに登録人が多く、斤数も高いエリアが広がっていることである。糸割符会所を中心に見れば、中心部に薄いのに対して、その周辺で高く、特に海岸線沿いでより高い傾向が見て取れる。

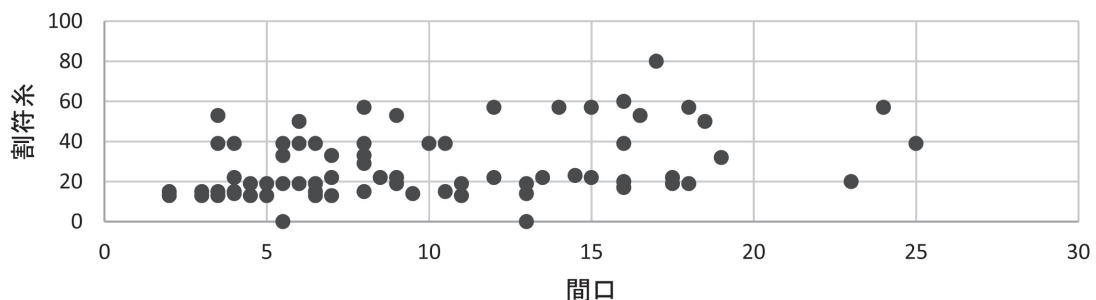


図9 元禄元年(1688)に下附された割符糸と間口との関係
注)横軸は、割符糸を下附された登録人の土地区画の間口(単位は半を含む間)で、縦軸は、糸の斤数。

一方で、下付された斤数の高低が、税負担の基準となった間口と関係があるのか、を見るために、両者の相関をとり、図9に示したが、殆ど関係は認められないと言わざるを得ない。①でも言及したように、初期の惣年寄は糸割符年寄を兼ねる門閥特権商人であったが、貿易体制の変化、生糸貿易の衰退によって17世紀後期には新興町人勢力に交代したと既に指摘されている点と関わるのであろう。なお、掛屋敷があり、その解釈も問題になるが、先の図8と図9では割愛している。

むすびに代えて—今後の検討課題

最後に、今後の検討課題を3点、挙げたい。

今回のプロジェクトが学界に対して主張し得る最大のメリットは、修復を施し、多数、撮影したデジタル写真を統合して、高精細画像を構築したことである。この点を生かして、ズームアップが可能になるから、文字注記の確定をすることが、第一の課題としてまず挙げられるであろう。今回提示した散布図(図4, 5, 9)も、その確定値に基づいて書き換えるべきである。

さらに、元和以前、戦国期における堺のプランについては、考古学的発掘に頼らざるを得ないことは、はじめにでも指摘した。元和の環濠都市設定以降、特に摂津・和泉国境が大小路にされ、整理が施されているが、その前は、どういう様相を示していたのであろうか。摂津国一宮である住吉神社のお旅所が、大小路より南の宿院にあり、和泉国内に当たるとは、不自然なのではないだろうか。このように国の一宮に指定された神社のお旅所が他国に位置している事例が他にもあるのか、再検討が必要であろう。都市プランの再検討、と集約できよう。

堺市博物館本に「海二入」と注記された地区は、宝永地震で被害があった可能性はあり得る。この点に注目して、防災研究との接合を試みるのが第三の課題である。写真4は、過去に起こった地震として宝永地震にも言及している擁護爾である。大浜公園に置かれている擁護爾自体は、嘉永七年11月5日の南海地震に関わって設置され、堺市指定有形文化財となっている。

今後とも「堺大絵図」に注目して、研究を進めたい。



写真4 大浜公園の擁護爾(2011年11月23日撮影)

註

- (1)——複製版は、前田書店編集部編 1977。
- (2)——堺市役所で閲覧に供されている「震災復興土地区画整理事業地区内前後対照図」は有用である。昭和34=1959年「8月11日施行」と注記されている。
- (3)——嶋谷和彦 2010, 特にpp.85-6。
- (4)——近世前期における都市像を一般的に概観すれ

ば、最大規模の江戸の場合、宝永・寛保「沽券絵図」の前身は元禄期の町割図にある。つまり江戸を対象とした幕府による都市政策は、同時期に堺でもみられた。堺は、中世との関係が問題になり、町割について中世と近世との関係が論じられている。堺のように全く断絶する例として、同じ港町の博多があり、踏襲されていると見なされる

京都との違いを考える必要がある。先の断絶を検討するにも、考古学的資料は有用である。

(5)——朝尾 1977 p.55, 56

(6)——前掲注2

(7)——共同研究の最後の期間で企画された特集展示では原寸大のプリントアウトを1枚にして床に置き、ビニールシートで覆って上を歩いて展覧できるようにした。その際に気付いた論点である。床に貼られたプリントアウトは、実際の絵図とは違って、痛めるという気兼ねもいらず、あちこちに移って観察できる貴重な機会であったと言える。その効用が現れた、と考えられよう。絵図上の貼り紙の下に、以前の記載が隠されている部分も認められ、絵図面の解釈にまで踏み込む新発見も、あった。

(8)——建物と土地区画線との関係については、山口家住宅に関するデータとしての写真2を参照されたい。更なる考察をするには、地籍図による判断が望まれる。

(9)——拙稿 2014

(10)——拙稿 2012a

(11)——山澄 1977 p.135 と p.139.

(12)——前掲 注11 p.139。「市役所図において『海ニ入』とある」という表現は、堺市中央図書館所蔵絵図で海岸線に「町屋、海に成る」注記がある点とも符合しよう。

(13)——拙稿 2012b pp.85-6 で福島雅蔵 2011 p.53 を引用しながら、慶応4 (1867)年両農人町宗門帳に見る実態を説明した。「日常の衣食住の生活方面では、農人町本来の農業関係よりも、都市日常の経済生活に関係する製造業と、その販売の職名が多数をしめ」た点が重要である。[複製版：前田書店出版部編 1977]

江戸時代前期には堺廻り三ヶ村とともに堺奉行が支配したが、元禄四年 (1691)、堺廻り三ヶ村が幕府の代官支配地となっても、農人町は堺奉行の支配地として残り、農人町は堺奉行と所属村落の庄屋の支配地という町方・村方の二重支配の形態になった。

(14)——前掲 注11 pp.105.

参考文献

- 朝尾直弘 1977 「大絵図の背景」, 前田書店出版部編『元禄二己巳歳堺大絵図』前田書店
- 稲津近太郎 (吉江集画堂地籍地図編輯部) 編 1911『大阪地籍地図』吉江集画堂
- 大国正美 1996 「太平の世の港町と役割」神木哲男・崎山昌廣編著『歴史海道のターミナル』神戸新聞総合出版センター
- 大阪歴史博物館編 2010 『特別展新淀川 100 年水都大阪と淀川』大阪歴史博物館
- 小野田一幸 2004 「人口構造からみた兵庫津」神戸市立博物館編『特別展よみがえる兵庫津－港湾都市の命脈をたどる－』神戸市立博物館
- 角山 榮 2000 『堺－海の都市文明－』PHP 研究所 (PHP 新書)
- 堺市役所編 1930 『堺市史第 3 卷』堺市役所
- 堺市博物館編 2015 『堺復興－元禄の堺大絵図を読み解く－』堺市博物館
- 嶋谷和彦 2010 「中世・堺の環濠をめぐる諸問題」『都市を区切る－中世都市研究 15』, 山川出版社
- 玉井哲雄 2010 「元禄二年堺大絵図」『歴博』160
- 長尾 武 2009 「堺市・擁護壘」, 神から賜った壘』『歴史地震』24
- 鳴海邦匡 2010 「絵図からみた近世前期大坂における河川整備事業－篠山藩青山家文書の分析から－」『2010 年人文地理学会大会研究発表要旨』(No.105)
- 鳴海邦匡・上田長生・大澤研一 2009 『篠山藩青山家文書』絵図目録：近世前期大坂周辺絵図』(鳴海邦匡)
- 西山昭仁 2009 「宝永地震 (1707) における大坂での地震被害とその地理的要因」『京都歴史災害研究』10 号
- 藤田裕嗣 1983 「中世農村における市場とその取扱商品」京都大学文学部地理学教室編『空間・景観・イメージ』地人書房
- 藤田裕嗣 1986 「流通システムからみた中世農村における市場の機能」『人文地理』38-4
- 藤田裕嗣 2010 「地籍図を用いた都市空間研究－考古学との融合を目指した歴史地理学的観点－」千田嘉博・矢田俊文編『都市と城館の中世－学融合の試み－』, 高志書院, pp.61-84
- 藤田裕嗣 2012a 「15-17 世紀における兵庫と堺をめぐる国際交流の地理的背景－大阪と淀川の整備事業に注目して－」『海港都市研究』7
- 藤田裕嗣 2012b 「地理学からみた都市的な場－絵画史料に『都市』景観を探る－」『都市的な場－中世都市研究 17』, 山川出版社
- 藤田裕嗣 2012c 「元禄の堺大絵図－巨大都市図を歩く－」『歴博』175 号
- 藤田裕嗣 2014 「地籍図を用いた景観復原と災害復興」『史潮』新 76 号

-
- 藤本史子 2008 「都市遺跡兵庫津の復元的研究」『大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告』7(兵庫津の総合的研究－兵庫津研究の最新成果)
- 前田書店出版部編 1977 『元禄二己巳歳堺大絵図』前田書店
- 村田路人 1995 『近世広域支配の研究』大阪大学出版会
- 村田路人 2007 「宝永元年大和川付け替えの歴史的意義」大和川水系ミュージアムネットワーク編『大和川付け替え三〇〇年：その歴史と意義を考える』, 雄山閣
- 村田路人 2009 『近世の淀川治水』, 山川出版社
- 矢田俊文 2013 「1707年宝永地震と大坂の被害数」『災害・復興と資料』2(新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野) pp.118-122
- 山澄 元 1977 「堺大絵図に関する地誌的考察」前田書店出版部編『元禄二己巳歳堺大絵図』前田書店
- 柚木 学 1992 「近世海運の展開」, 新修神戸市史編集委員会編『新修神戸市史歴史編Ⅲ近世』神戸市
- 吉田 豊 2011 「絵図でみる堺港」『堺研究』33

(神戸大学大学院人文学研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究代表者)

(2016年1月25日受付, 2016年5月30日審査終了)

The Landscape and Urban Functions in the *GRAND MAP OF SAKAI* Dated 1689

FUJITA Hirotsugu

The *Grand Map of Sakai* dated 1689 held by the National Museum of Japanese History records land ownership details for the late seventeenth century. After the city of Sakai was completely destroyed by fire during the summer siege of Osaka in 1615, a portion of the encircling moat remaining today was dug out by the Shogunate, and the area inside the moat (Sakai-ku, Sakai City, Osaka Prefecture) is believed to have been laid out anew. Comparing the information included in the map with historical sites in Sakai within the moat, it is clear that the location of the Kishū Kaidō road that functioned as an axis crossing Sakai from north to south, with the Ōshō-ji road running east-west along the borders of Settsu and Izumi Provinces intersecting at right angles, basically follows the original plan. Therefore, this is a significant map which has the possibility of permitting a recreation of the land distribution of the Genroku era. The scale of this map is 1/325.

Archaeological excavation is extremely important as an approach to reconstructing the structure of the medieval city lying hidden underground. The findings of excavations shedding light on the structure of the medieval city lying deeply buried have not been sufficient. The present map accurately reflecting the early Edo period city is evaluated as an important graphic resource.

A photographic reproduction has been published, and although research is advancing in such fields as pre-modern history and architectural history, the 1977 publication is dated and has the drawbacks of being overly large and the details difficult to read. It is anticipated that recent advances in graphics processing will overcome these drawbacks. Through preparing digital imagery of the map, archaeological data and detailed examinations of locations related to that can be made, aiming at a basis for cooperation between archaeology and historical geography, historical documents, and architectural history.

The Yamato River flowing through the Kawachi Plain towards the east of Osaka Castle flowed north, but was altered to flow west in the early eighteenth century. Due to that, the volume of silt deposited in the sea directly north of Sakai increased, and the perimeter of Sakai Bay became shallower, and these came to have a major impact on the flow of goods.

Key words: Sakai, map, moat, land ownership, digital photography
